



平成30年9月27日
佛教大学附属幼稚園

「機が熟してこそ」

園長 田中典彦

とつても暑かった夏が過ぎて、秋の気配を感じることができるようになりました。先日子どもたちの明るい声が聞こえてきました。「あそこにさ、真っ赤な花が咲いているよ！おかしいなー、何にもなかったのにねー」。「うん、僕もみたよ！私も見たよ！そんなのがあるってぜーんぜんわからなかったのに」。口々に驚きの声。きれいさだけではなく不思議さをも捉える子どもたちの感性というのはすごいと思いました。突如として現れるその赤い花は秋の彼岸に咲く「彼岸花（まんじゅしゃ華）」と呼ばれているものです。

昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と言われています。暑さの残る彼岸であっても、寒さが早くやってきたような彼岸であっても、かならずこの時期にピタッと合わせて咲くのです。この時期になると本当に何もしなかったように思えた意外なところから急に花芽をのぼして、真っ赤な華をつけて私たちの目を奪います。「華」という漢字がびつたりの姿ですね。田舎に育ったわたしは、田んぼのあぜ道一杯に真っ赤に咲いているのをよく見ていたものです。そして毎年同じようなことを思っていました。「彼岸だということを知っていて咲くのかな？」って。「しかもなぜ秋の彼岸なの？」

わたしたちの周りにはいろんな花があります。サザンカや水仙のように冷たい冬の中に花をつけるもの、梅や桜のように春に咲くもの、朝顔やヒマワリのようにとつても暑い時期に咲くもの、そして秋に咲く花などです。春に咲く花々は温度を感じ取って咲き、秋の花は日の長さを感じ取って咲くものが多いと聞いたことがあります。しかし不思議です。

わたしたちはそれをそれぞれの本性、つまり本来的に持ち合わせている性質であるにとらえています。しかしたとえそれが本性であったとしても、温度や光やその他のいろんな環境や条件がととのってはじめにきっかけがあたえられ、花を付ける活動が開始されるのであろうと思います。このようにいろんな縁をいただいて発動すると教えるのが仏教です。球根や株そのものはそのような仕組みを持った因であり、きっかけを与えたり支えたりするのが縁であると理解できるのです。「因縁所生」（いんねんしょしょう）と言われ、すべてのものは因と縁とによって生じられたものであるということでもあります。

わたしたち人間も縁を得て発動する本性的な仕組みを持っているのです。それを機根（きこん）と言うのです。その根が機を得て、つまりチャンスを得て自己を形成して行こうとするのです。よく一般に「機が熟して」と言われるのもこのようなことです。何を機として花を咲かせるか、熟すかはそれぞれによって異なっているのです。

子どもさんもみんなそうです。ですから同じ年齢であるから同じでなければならないのではありません。春に一斉に花を咲かせねばならないことはないのです。春に咲く花もあれば、秋に冬に咲く花があるように機が熟せばみんな花を付け、実を付けるのです。それぞれの子どものさんは興味のあるものも感受性も違います。何かを機として、縁として、きっかけとして子どもさんの本性が自己形成へと発動すると信じます。幼稚園ではそのようなきっかけを

「たのしいな、うれしいな」の中で得てもらえるよう努めています。
保護者の皆さまも共に子どもさんたちの成長を見守ってくださるよう願っています。

